

学生が参画する子育て支援センター設立のため、

「岡崎げんき館」における実践的な取り組み

古川 洋子
愛知学泉大学

The practical approach at “OKAZAKI-Genki KAN” by the university students, for establishing of the child raise support center.

Yoko Furukawa

キーワード:子育て支援 Child raise support,

養成校 School of nursery teacher training,

専門性 Expertise,保育 Nursery

1 はじめに

2017年改定された「保育所保育指針」では、保護者への支援が「子育て支援」と示された。子どもをとりまく環境が、少子化や核家族化、ひとり親家庭の増加などに伴い、大きく変化している。また、地域のつながりが希薄化し、家庭における子育ての負担や不安を感じている保護者が増加している。今回の改定で、ますます保育所の特性を生かし、保育の専門性を有する保育者による支援を提供することが求められている。

こどもの生活専攻の学生は、保育所実習、幼稚園実習、施設実習等の実習を通して、保育者の役割や子どもとの関わりを実際に学んでいる。しかし、学生の抱える就職後の不安の一要因として、保護者との関わり方が挙げられる。現状として、保護者の姿を理解し、子育て環境などについて、学生に学修させることは難しい問題である。そこで、本研究では岡崎げんき館でおこなわれている活動に、学生が主体的に参加することによって、学生の意識の変容を明らかにし、岡崎げんき館での経験の重要性を示唆することを目的とする。さらに、これからの保育者養成校における子育て支援活動の取り組みについて検討する。

2 子育ての現状

図1は、乳幼児の遊び相手をあらわしている。乳幼児の遊び相手は「母親」がもっとも多い。核家族化の状況の中で、子どもと一人で向き合う母親は、「孤育て」に奮闘しなければならない。母と子の密着度が高まり、「息がつまりそうな子育て環境」に繋がりやすい状況になっている。筆者が関わっていた、子育て支援サークルに参加していた母親からの話である。

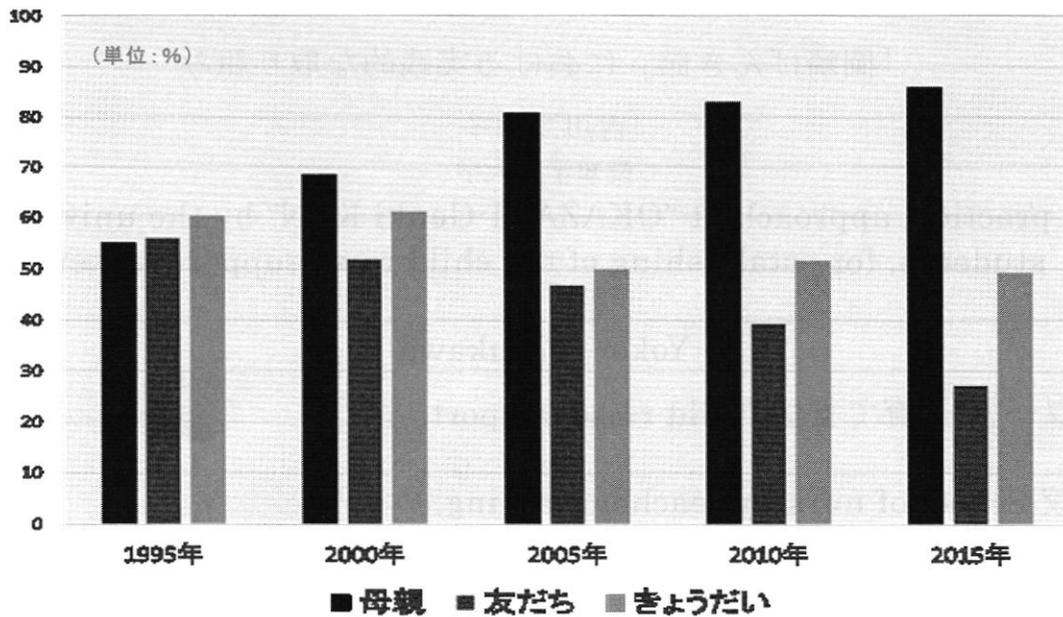


図1 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手
 出典 ベネッセ教育総合研究所「幼児の生活アンケート 2015年」¹⁾より作成

- ・ 育児について教えてくれる人がそばにいない。ネットからの情報にたよっているが、情報が正しいのか、間違っているのか、判断することができなくて、より一層、悩む。
- ・ 自分の子育てが、育児書や雑誌通りにうまくいかず不安になる。
- ・ 子育ての価値観を周囲から押し付けられることがあり、ストレスをととても感じる。
- ・ 子育てのために、自分のやりたいことができない。社会から、取り残されてしまうのではないかという不安がある。働きながら子育てをうまくやっている人が、うらやましいと思うことが多い。

このような、保護者の多様な子育ての悩みを理解し、対応するスキルを身につけることも、保育者には求められている。1994年頃から、「子育て支援」という言葉が一般的になった。それまでに、保育所や幼稚園で、子育て支援をしていなかったわけではない。また、子育てを支援するという行為は昔からあるものだ。例えば、困ったことがあれば、お隣の家の人が助けてくれたり、近所のお年寄の知恵が役に立ったり、悪いことをすれば注意してくれる人が身近にいたりした。子育て支援は、新しくできたものではなく、昔からあった大事な要素を、新たなかたちでよみがえらせたことではないだろうか。

現在、様々な子育て支援が展開されている。少子化の進行や核家族の増加に加え、共働き家庭の増加、離婚などにより家族形態が多様化している。また、子育てに対し孤立感や負担感を感じる保護者が増えている。こうした子育て家庭を支援するため、「子育て中の居場所づくり」として、地域で子育て支援が盛んにおこなわれるようになった。学生が活動を行っている岡崎げんき館「子ども育成ゾーン」は、気軽に施設の方に子育ての相談ができ、親子で過ごす身近な居場所となっている。

3 岡崎げんき館「子ども育成ゾーン」での取り組み

(1) 事前の取り組み

・子育て支援について学ぶ

保育原理の授業（1年生後期）で、学生は子育て支援について学ぶ。保育者は、目の前の子どもとむきあうことのみでなく、子どもの保護者に対する役割、子どもが生活している社会に対する役割を担っていることを理解する。実際に、学生が地域で行われている子育て支援活動について調べたり、子育てをしている人に話を聞いたりして、子育ての現状について、自分の考えをまとめ発表をする機会を設けた。

・岡崎げんき館見学

見学は、岡崎げんき館そのものの周知を図るとともに、「子ども育成ゾーン」で行なわれている子育て支援の取り組みを学生に知らせるためにおこなった。子育て支援とは何かを含め、どのような人が利用するのか、利用者はどのような目的で訪れるのかなど、施設の方に話をしてもらった。学生は、各自のメモを参照し、訪問した感想などをまとめレポートを提出した。



写真1 岡崎げんき館

・DVD視聴

母親たちの楽しい子育て実現に、支援センターがどのようにかかわり合っているのかを紹介した「子ども家庭支援センターとは」の視聴をおこなった。また、上級生が取り組んだ岡崎げんき館活動の映像を見せ、活動イメージをもたせた。

(2) 岡崎げんき館「子ども育成ゾーン」活動内容

2016年度の活動は10回実施した。前年度同様、夏休みと春休みの期間におこなった。2016年度入学した1年生は学生数が少なく、春休みの活動（表1）のみに振り分けることが可能であった。そのため、夏の活動はすでに経験した上級生を募集した。1年生は、入学後の1年を通して学んだことを活動に生かすことができ、春休みの活動は有効であった。ここでは春休みの活動を中心に報告をする。

表1 春休みの活動

2月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「とんとんとん」 ・パネルシアター「ひよこちゃんのいいいいな」 ・手袋シアター「ピカチュウで遊ぼう」 ・大型絵本「へんしん列車」 ・リズム遊び「バスにのって」
2月16日	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「ミッキーマウス」 ・紙芝居「こんにちは」 ・パネルシアター「山の音楽家」 ・リズム遊び「バスにのって」
2月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「ぐーちょきばーでなにつくろう」 ・大型絵本「ぴょーん」 ・パネルシアター「パンダうさぎコアラ」 ・手遊び「とんとんひげじいさん」 ・紙芝居「まって～」 ・リズム遊び「バスにのって」
3月2日	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「一本と五本で」 ・大型絵本「のりものいろいろかくれんぼ」 ・パネルシアター「ひよこちゃんのいいいいな」 ・リズム遊び「バスにのって」 ・ゲーム「ボウリング」
3月9日	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「はじまるよ」 ・大型絵本「いつもいっしょ」 ・紙芝居「おんぶおんぶ」 ・リズム遊び「バスにのって」
3月23日	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「ぐーちょきばーでなにつくろう」 ・大型絵本「たまごの赤ちゃん」 ・紙芝居「おおきくおおきくな～れ」 ・歌遊び「バスごっこ」

(3) 学生の感想 (春休み：1年生 原文のまま記載)

- ・本当に喜んでくれるか心配だったけど、お母さんと子どもと一緒に楽しくやっている様子を見てうれしくなりました。「バスにのって」の時、お母さんたちがのりのりだったので、びっくりした。先生からげんき館の話聞いたときはやりたくないと思ったけど、活動に参加してまたやりたいと思いました。
- ・とても緊張した。もっと子どもがよってきてくれると思っていたが、お母さんから離れない子どもが多かった。活動の時は、友達と一緒にだったからよかったが、自由時間の時は何をしたいのかわからなかった。私は、お母さんと子どもの様子を見ることしかできなかった。せっかく遊びに来ているのに、お母さんから離れない子どもや、元気に遊

んでいる子どもがいた。色々な子どもの様子を見ることができたので、見ているだけで勉強になったような気がする。

- ・授業で見たDVDで、子どもとどうやって遊べばいいのかわからないお母さんがいました。げんき館に来ているお母さんの中にもそんなお母さんがいるかもしれないと思って計画を立てました。手遊びをしているとき、お母さんが写真や動画を撮っていました。子どもが楽しんでいる様子を見ているお母さんは幸せそうで、ニコニコ笑っていた。
- ・どんな感じになるのか、わからなくとても不安だったが、どうにか計画通りに活動ができてよかった。自由時間の時、お母さんたちが優しく声をかけてくれたので話げんき館にはよくきますか?と質問したら、お母さん同士で話をする場所になって、ここにきてストレスを発散しているようだ。

1年生は6グループに分かれて、岡崎げんき館「子ども育成ゾーン」で取り組む活動内容を計画し、自主練習を重ね、活動日を迎える。活動日は、げんき館に10時に集合、11時までリハーサルをおこない、11時過ぎから「愛知学泉大学のお兄さんお姉さんと遊ぼう」の活動が始まる。げんき館に集まってきた学生の表情は、とても緊張している。学生にとって、保護者も一緒に参加する場での活動は初めての経験である。なかには、初めて乳幼児とかかわる学生もいる。しかし、親子が積極的に活動に参加する姿を目の当たりにした途端、学生の表情が豊かになる。リハーサルでは見ることができなかつた、生き生きとした表情で、学生は親子とかかわっている。上記に報告した学生の感想に見られるように、学生は経験によって体得し、学びを深めている。そして、練習以上の力を発揮する。親子と直接的にかかわる体験のなかで、一方的な学生の成果発表の場ではなくなる。学生の意識のなかに、参加する親子のことを考慮しながら、活動内容を計画することが重要であることに気づいていく。また、子育てをしている保護者にとって、気楽に子ども連れで出かける場があることは心強いことだと、活動を通して気づいている。げんき館で、実際に親子と触れ合い、親子の姿を見て得られた経験である。

4 今後のとりくみ

こどもの生活専攻の学生は、4年間の学修を通して、子育て家庭への支援が保育者に欠かせない職務として位置づけられていることや、支援活動を行う社会的背景について理解して卒業する。また、知識として子育てにとまなう不安感や孤立感の現状は理解している。しかし、理解するだけではなく、その実態を学生に体感して欲しいと筆者は願っている。

2017年度からは、岡崎げんき館の活動「学泉のお兄さんお姉さんと遊ぼう」

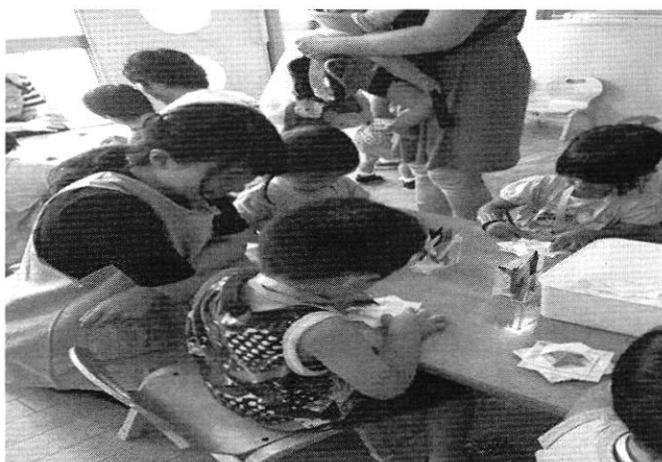


写真1 岡崎げんき館にて「こまを作ろう」

だけではなく、学生主体で活動をおこなう機会を増やしている。写真1は、岡崎げんき館の夏祭で、3年生の学生が計画を立て、活動をおこなった。参加した学生のなかには、失敗を克服するため再挑戦した学生もいた。また、保育実習等を経験した学生のなかには、もっと子どもとかかわりたいと夏祭りに意欲的に参加した学生もいた。意欲的な学生のためにも、今後は、岡崎市の総合子育て支援センターや、認定こども園でおこなわれている子育て支援活動などにも、活動の場所を広げ、保育者を目指す学生が、実際に子育て支援の活動に携わる活動を増やしていきたい。

小原、中西、直島(2016)の研究によると、「全国指定保育士養成施設565校(平成25年4月1日時点)を対象に、キャンパス内で行っている子育て支援活動の実施形態や内容、学生の参加形態や活動の内容等の実態調査を実施した。まず明らかになったことは、回答した189校のうち、約7割の保育者養成校が何らかの子育て支援活動を行っている実態が示されたことである」²⁾。この調査結果から、多くの養成校が子育て支援活動を行っている実態が明らかになっている。本学においても、教員、学生だけではなく、附属幼稚園や地域が一体となった子育て支援体制の構築を目指したい。(図2)そこでは、子育て家庭への支援のためだけではなく、地域との交流や貢献にもつながりができるのではないだろうか。また、多岐にわたって、学生が学修することこそが、実践的な子育て支援力を育む近道だと考える。このように、子育て家庭と地域の住民、そして大学が協力し合って、子育て支援活動をおこなうことによって、学生がいつでも活動できる環境を提供できたならば理想的である。実践的な子育て支援力を学内で修得できる「子育て支援体制」を目指すためにも、今後も試行的な取り組みをしていきたいと考える。

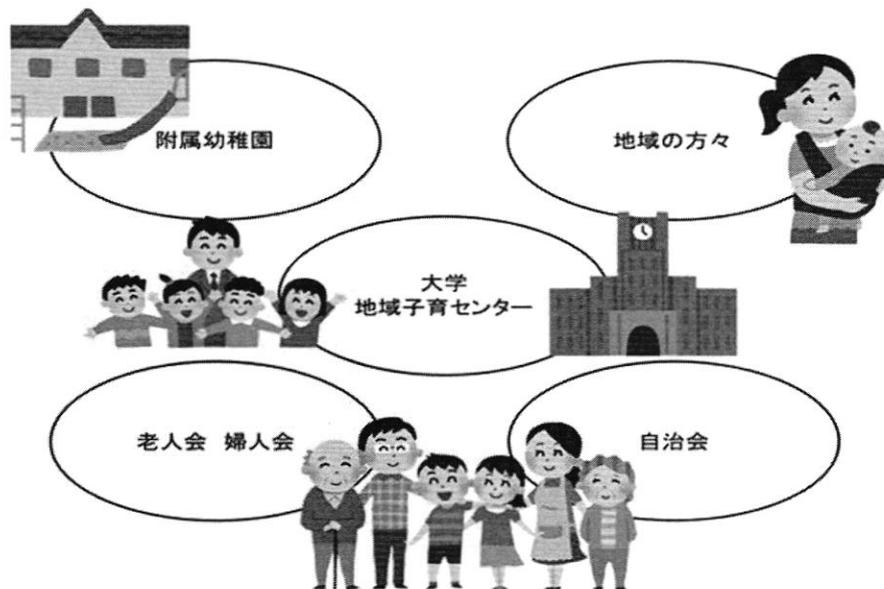


図2 大学を拠点とした子育て支援イメージ図

引用文献

- 1) ベネッセ教育総合研究所「幼児の生活アンケート 2015年 平日、幼稚園・保育園以外で一緒に遊ぶ相手」<http://berd.benesse.jp/research/>（閲覧日 2017年10月30日）
- 2) 小原敏郎, 中西利恵, 直島正樹, 石沢順子, 三浦主博：保育者養成校がキャンパス内で行っている子育て支援活動に関する調査研究『共立女子大学家政学部紀要』62, 153-163（2016）

参考文献

- 澁谷由美, 古川洋子：「“子育て支援”に関するとりくみ（1）-養成校の現状-」『愛知学泉大学・短期大学 研究論集』48, 59-66（2013）
- 阿部和子, 梅田優子編著：『保育者論』萌文書林（2012）
- 神田伸生, 高橋貴志編著：『子どもの生活・環境・遊びに向き合う』萌文書林（2013）